

文禄・慶長の役における稷山の戦いに関する韓国歴史教科書の記述の誤りについて

Some Discussions Concerning the descriptions of Battle of Jiksan in Korean History Textbooks

環太平洋大学名誉教授

小川 隆章

OGAWA, Takaaki

Emeritus Professor

International Pacific University

要旨：文禄・慶長の役（壬辰倭乱）における稷山の戦いに関して韓国の複数の歴史教科書が「朝鮮・明の連合軍が天安近くの稷山において日本軍に大勝利をおさめ、敗走した日本軍は朝鮮南岸に逃げて倭城に立てこもった…」と記述している。この記述には二重の誤りがあることを指摘した。諸文献を精査すると、①稷山で戦ったのは日本軍と明軍である、②明軍と日本軍の戦いは激戦であったが、勝敗の決着はつかなかった、の2点を確認した。日本軍が漢城へ侵攻せず、南岸まで撤収して倭城を築いて守将を定めて、残りの武将たちを帰国させたのは稷山の戦いで敗戦したためではなく、当初からの豊臣秀吉の指示に基づくものだったことを付け加えた。

キーワード：文禄・慶長の役、稷山の戦い、歴史教科書、歴史歪曲

I・はじめに

筆者は前稿（小川，2021）において引用した韓国人の言葉を再度引用して本稿を始めたい。李大根成均館大学名誉教授は「いま韓国では歴史と真摯に向き合うことを拒否する考え方が広がっています。中国と同様、我々韓国にも昔から国家、民族、家門の利益のためには虚偽、歪曲、ねつ造も許されるという、“倫理観”があります。私はこうした状況に強い危機感を抱いています。」と述べた言葉、もう一つ河永輝（嘉会古文書研究所所長）（2008）は「歴史的知識とは何よりもまず事実に基づいて形成されねばならない。しかし、実際には恣意的に再構成される場合が少なくない。私たちが常識的に受け入れていたり、あるいは広く普及している歴史的知識の中には、虚構に満ちたものが意外に多い」という記述だ。同氏は「虚構に満ちた歴史知識」の一例として、壬辰倭乱、日本で文禄・慶長の役と呼ばれる戦役の中の火旺山城の防衛について詳しく論じている。

1597年の豊臣秀吉による朝鮮への2度目の侵攻（慶長の役、丁酉再乱）の際、義兵の中心人物として最も名高い郭再祐（1552-1617）はこのとき朝廷から防御使に任じられ、慶尚南道昌寧郡の火旺山城を守ること

を命じられた。この山城は蔚山から昌寧をへて全羅道へ向かう加藤清正の進路に当たる重要拠点であった。清正軍の先鋒隊が城に近づき清正の本隊も姿を表した。倭軍の槍と刀が陽の光に反射し、幟は平野を覆った。兵馬の行列がかなたまで続いて居た。城を守る将兵が恐れをなして青くなっているのを見て、郭再祐は彼らを静かに落ち着かせた。一昼夜対峙ののち、清正軍は攻撃せず全羅道の要衝・全州攻略に加わるため西に向かった。火旺山城を包囲して威嚇し、自分たちが追撃される懸念がないことを察して先を急いだのだ。郭再祐と将兵は城を守備して避難民を守るという使命を果たした。この時から137年後、『倡義録』という書物が刊行された。その中に「火旺入城同苦録」という文書が収録された。これは火旺山城へ郭再祐とともに入り城を防御した人物の名簿である。699人の姓名・字・生年・号・居住地などが記載された。居住地が慶尚北道安東の人が115名と最も多く、慶州が63名、漢城が55名など火旺山城から遠く離れた、朝鮮時代には往来することも困難な地域からの人々が近隣の人々より比較にならないほど多く加わっていることは真実を記録したものではない、と断定された（逆に、この時には別の場所に居たことが明らかである人物も名簿に載っていた）。朝廷で主流派だった老論派に対抗して、

南人派の両班たちが作り出した（捏造した）ものだという。後世になって、この同苦録に自分の先祖の名前を見出した人々によって、その先祖の行状録が作られ、その中で自分たちの先祖が敵軍と勇ましく戦いどんな手柄をたてたか、実際には無かった虚偽の活躍を記した出版がなされ、その数17点に上るといふ。このような作られた歴史の記憶が広く流布している例が韓国には多くあるのだろう。

II・本稿の課題

筆者が気づいた文禄・慶長の役に関して虚偽の記述の一例ではないか、と疑いを持ったのは韓国の歴史教科書における稷山の戦いについての記述である。

韓国教育部編（2003）大槻健ほか訳『世界の教科書シリーズ1 新版・韓国の歴史「国定韓国高等学校歴史教科書」』（明石書店）に、「3年間にわたった会談は決裂し、再び倭軍は侵入してきた。これにたいして朝鮮軍と明軍は稷山で防ぎ、南方へ撃退した。」（p.212）

イ・インソクほか（2013）『世界の教科書シリーズ（39）検定版・韓国の歴史教科書「高等学校韓国史」』明石書店

「日本は休戦交渉が決裂すると再び攻撃を始めた（1597・丁酉再乱）。朝鮮と明の連合軍は稷山で日本軍の北上を防いで南に押し出し、李舜臣は鳴梁海戦で大きな勝利をおさめた。戦況が不利になった倭軍は、豊臣秀吉が死ぬと日本に撤収した」（p.84）

もう一冊、韓国教育部（2005）『韓国の高校歴史教科書・高等学校国定国史』（三橋広夫訳・明石書店）p.98

「3年余にわたる明と日本の間の休戦会談が決裂すると、倭軍が再び侵入してきた（1597）。しかし、朝明連合軍が倭軍を玉浦で撃退し、李舜臣が敵船を鳴梁で大破させると、倭軍は南海岸に再び後退した。戦況が不利になった倭軍は豊臣秀吉が死ぬと本国に撤収した」（p.98）

この3つ目の教科書の中の「朝明連合軍が倭軍を“玉浦”で、…」というのは書き間違いであろう。稷山と書くべき所を玉浦としてしまったのではないか。玉浦は韓国南岸の巨済島の入り江の名前で、1592年5月7日、李舜臣が率いる朝鮮水軍が日本の船団を攻撃して最初の勝利を挙げた場所として名高い。

これら3点の教科書は豊臣秀吉による2度目の侵攻（日本では慶長の役、韓国では丁酉再乱と呼ぶ）の際

に、いずれも朝鮮と明の連合軍が稷山で迎え撃って勝利し南岸へと撤退させた、と記述している。

本稿ではこの記述が正しいかどうか文献的検討を行ってみたい。

III・文献的検討

『日韓歴史共同研究報告書第2分科会篇』（2005）に鄭求福（韓国学中央研究院韓国学大学院教授）は秀吉軍の2度目の侵攻について

「名護屋に赴いた沈惟敬らによる講和が決裂すると、1597年1月15日、秀吉は約14万の軍を動員して再度侵攻を試みた。このとき既に明を討つという名分は無くなり、全羅道地域を占領する作戦に代わった。明からも即時に派兵が行われた。日本軍は水軍が敗北したのを始め、朝・明連合軍によって9月5日、稷山戦鬪で敗北し戦意を失って海岸地域に後退した。9月10日、鳴梁で李舜臣が日本軍を破った」（注1）

と、ここでは稷山の戦いを教科書と同じく朝鮮と明の連合軍と日本軍の戦いとしている。

ところが、それよりずっと以前に、金熙明（1972）『日本の三大朝鮮侵略』の中で、

「8月16日、湖南地方が日本軍に占領された情報は、京城そのほかの地方に大きなショックを与えた。都民が各地に分散しはじめており、朝廷では国王の避難をすすめる者が現れた。湖南地方から退却した明軍は、漢江周辺で守りを固め、平壤に駐屯した楊鎬軍は、慌てて京城に来て日本軍の北上を食い止める姿勢を取った。全州で合流した毛利・加藤の両軍は、公州を経て全義・鎮川に進み、黒田軍の一部は稷山に進んだ。このころ楊鎬は、京城から解生・牛伯英・楊登山らの軍を南下せしめたが、9月5日のあけがた、稷山の北方、素沙坪（弘慶院）で黒田軍と出会い、一大激戦となった。あくる6日の未明、木川・清川方面に退走する残兵は幾人もいなかったといわれている。この素沙坪の会戦は、さきの平壤・幸州の戦いととも、倭乱三大捷といわれているが、この会戦で受けた明軍の損害もひどいもので、軍団を維持できないほどであった」

ここでは、日本の黒田軍と明の解生らの軍が激戦し、両軍の損害が甚だしいが黒田軍は生存者わずか撤収した、ということになる。戦鬪の日付が9月5日となっているが、7日が正しい。日本歴では一日ずれて6日である。

李啓煌（仁荷大学教授）は『岩波講座・日本歴史第

10卷近世1』において、「朝鮮から見た文禄・慶長の役」の章を執筆した。序文において、本稿では韓・日の先学の研究成果を踏まえつつ、朝鮮史の基本資料である朝鮮王朝実録を用いて戦局のたどりながら、朝・日・明三国の対応を探ってみたい」と述べている。稷山の戦いについては

「9月7日、黒田の率いる五千余が稷山付近に至るが、そこに駐屯していた明軍一万余と交戦して大敗北を喫した。やむを得ず右軍は天安に後退した後、慶尚道へと南下した」と記述している。

朝鮮側の基本資料である 朝鮮王朝実録によれば (宣祖修正実録 宣祖30年9月)

「經理楊鎬，副総兵解生等をして，大いに賊兵を稷山に破らしむ。是より先，賊，南原を陥してより，勝ちに乗じて長軀し，京畿に進逼す。經理楊鎬，平壤に在りて之を聞き，馳せて京城に入る。提督を招き不戦の状を責む。与に計を定め，密に騎士の精勇なる者を選び，解生・牛伯英・楊登山・頼貴をして之を領し，稷山に迎撃せしむ。諸軍および我が人，皆な知る莫き也。解生等，兵を稷山の素沙坪に伏せ，賊の未だ及ばざるに乘じ，列をなし縦に突騎して撃つ。賊，披靡して走り，死者甚だ多し。又，遊撃罷賽を遣し，二千余騎を将て之に継ぎ，四将と与に合勢追撃し，また，之を破る。是日，經理・提督，上に出でて江上に視るを請う。上，已むを得ず行く。人心恟濯とし，士庶皆な荷担して立つ。内殿は兵を避け西に幸す。捷報至るに及び，京中乃ち稍や定む。」

ここでも稷山で日本軍と戦ったのが明軍であり，朝鮮の官軍も義兵も加わっていないことが明らかだ。

このときの領議政（総理大臣）だった柳成龍が書いた『懲愆録』では59章「賊が南方へ退く」として「賊兵が退いた。その時，賊は三道を蹂躪した。その通過するところでは，みな，家屋を焼き払い，人民を殺戮し，およそ我が国の人を捕えればことごとくその鼻をそいで威を示したので，賊兵が稷山に至るや，都城の人々はみな逃れ散った。9月9日，内殿（王妃）は兵を避けて西に下られた。（明国の）經理楊鎬，提督麻貴は，京城にあって，平安道の軍5千人，黄海，京畿道の軍数千人を徴収し，それぞれ分かって漢江の浅瀬を守らせ，倉庫を警守させた。賊は，京畿道の境界から退去した。加藤清正が再び蔚山に駐屯し，小西行長が順天に駐屯し，島津義弘は泗川に駐屯し，その先頭から後尾まで七，八百里にわたった。（以下略）」と述べている。朝鮮軍あるいは明軍との戦闘に敗れて南岸へ退いたというわけではないことを示唆してい

る。

また，稷山の戦いについて最も詳しく記述しているのは大著『壬辰戦乱史』上中下3巻を著した李ヒョンソクであろう。この著者は日本の陸軍士官学校を卒業し，韓国陸軍のエリート軍人として活躍した人だ。経歴を見ると，ソウル大学・大学院を修了し，韓国陸軍の師団長，連合参謀本部第一部長，陸軍戦史監，第三管区司令官などを歴任，国防史学会長を務めた人物だ。この著者は極力客観的に各戦闘も冷静に事実を記述する姿勢を見せて居る。「稷山付近戦闘」では冒頭が「関連諸将および交戦兵力」であり，東征軍側として副総兵・解生と7人の明国の武将の名前を示し総勢1万人，日本軍側として黒田長政と11人の武将の名前を挙げ，総勢五千人としている。「戦闘前の概況」を詳しく述べ，「戦闘状況の概況」では詳しく記述しているが明軍側と日本軍（黒田軍）側の主張を織り交ぜているので，やや矛盾する印象も受ける。明軍が優勢に戦ったのは黒田軍の先鋒隊との戦いであって，黒田長政の本隊が到着すると，明軍側にも2千人の赴援軍が加わり，両軍ともに末院の原野で奮戦数合に及んだが，勝敗未決のまま（日本側主張による・と注記）終わった。一方，毛利秀元の率いる毛利軍が駆けつけ明軍の側面を突破，黒田軍の危機を救った後，天安方面に後退した」と記述している。「戦闘後の概況」の項に，「黒田長政にとって，悪夢のような稷山戦闘であった。彼は数日間，稷山に駐屯しながら付近一帯を悉く放火掠奪して積もり積もったうぶんの腹いせをしたのち，悄然と撤退した。…」と記している。これでは，勝ったはずの明軍が先に撤収し，負けた黒田軍が数日間稷山にとどまったのは釈然としない。黒田長政は明兵の鼻を収集し軍目付竹中隆重・太田一吉に引き渡し，日本歴7日（明国及び朝鮮の暦では8日）の日付で受取状を得ている（北島，p.692）。また，中野（2008，p.204）は慶長2年8月16日から9月19日までの間の12回，黒田長政宛の鼻受け取り証文が発給され現存していることを一覧表にしている。上記の金熙明の記述のように黒田勢が稷山で惨敗して，残兵わずかな状態であるなら，こんなに頻りに鼻の収集・受け渡しが行われたとは考えにくい。

このほか，李成茂・著『朝鮮王朝史（上）』（p.458）では，「しかし，戦列を整えた朝明連合軍が日本軍の北上阻止に万全を期し戦況は好転していった。同年9月の素沙坪の戦いである。明の將軍楊鎬が稷山付近の素沙坪で黒田長政の本隊に大勝し，日本軍の北上を絶ったのだ。」ここでは解生でなく彼の上官にあたる

楊鎬の名前になっている。上記の朝鮮王朝実録の通り、楊鎬は漢城に居て副総兵の解生をして稷山へ出撃させた人物である。

さて、日本軍は黒田軍5千だけではないので、たとえ黒田勢に勝ったとしてもその他10万以上の日本軍の動向を決定することは無いはずである。日本軍が都へ侵攻しなかったのは、黒田軍が負けたためと理由づけたのである。ここでも明軍が稷山の素沙坪で戦ったとしている。

日本語のWikipediaを見ると、冒頭に「稷山の戦い（しょくさんのたたかい）は慶長の役において日本軍と明軍との間で戦われた戦闘。」と断定している（2021/1/10閲覧）。慶長2年2月21日の豊臣秀吉の朱印状に指示されているとおり、「全羅道を成敗し、忠清道その他にも出動すること」、目標の達成後は城（倭城）を築城し、城の在番担当を定め、それ以外の軍は帰国する」というのが作戦目標であった、とする。

英文のWikipedia（Battle of Jiksan）ではやはり冒頭に「1597年10月16日（グレゴリオ暦表記である）、明軍と日本軍の間で戦われた軍事衝突である」とし、戦闘の結果を「両軍が撤収」とし、「どちらが先に撤収したかは両論があり、その結果、どちらが勝利だったか、についても両論がある」と記している。また、稷山は日本軍が2度目の侵攻で達した一番都に近い地点だった、と記している（2021/1/10閲覧）が、中野（2004）によれば、黒田・毛利の軍勢は忠清道天安からさらに都に近い京畿道安城および竹山まで掃討してから南へ向かったという。

日本側の当事者である黒田藩の「黒田家譜」では要約すると、
「黒田勢の先鋒が本隊よりだいぶ離れて進んで行くと夜あけてみれば、眼前に明の大軍が駐屯していたのに気づいた。一旦退却して長政の本隊と合流して戦うべきか、とも思ったが、追撃されたら支えきれないだろうと危惧し、自分たちから襲撃を加えて敵が怯むところで、引き退こうとして、鉄砲隊の射撃に続いて一斉に打ちかかって戦が始まった。遠く鉄砲の音を聞いた長政の本隊も駆けつけて激戦になった。互いに苦闘を繰り返していると、毛利秀元の先鋒が天安から急行し、続々と毛利勢が加わり、明軍は水原へと撤収した。日没までの時間も長くないので、追撃せず、今日の戦いはこれまでとした」という。

北島（1995）『豊臣秀吉の朝鮮侵略』（p.204-205）では

「ここに日明両軍が衝突し、稷山の戦いが始まった（中略）激戦を展開したが決着はつかず、彼我両方ともかなりの死傷者を出し、日暮れに至って両軍とも引き上げた。なお、「朝鮮王朝実録」や「乱中雜録」などの朝鮮側史料はこの戦いにより、日本軍のソウル再侵入を阻止したものとみなし、平壤の戦い、幸州の戦いについて、稷山の戦い＝金烏坪の戦いを“朝鮮三大戦”としている」と述べる。

北島（2002）『日本史リブレット34秀吉の朝鮮侵略』（p.86）でも、

「同年9月初旬、黒田長政は忠清南道稷山に迫り、ソウルを窺う気配を見せた。この時、明副総兵解生も稷山に兵を配置しており、ここに両軍激突となったが、決着はつかず、双方ともかなりの死傷者を出し、両軍とも引き揚げた」

『国史大辞典第12巻』および『日本歴史大事典3巻』の「文禄・慶長の役」（北島万次・筆、1991および2001）で、第二次侵攻の主要な戦いを列挙する中で、「同年9月、忠清道稷山（稷山は忠清北道の京畿道に接した地点）の戦。毛利秀元と黒田長政の兵が明軍の副総兵解生の軍と戦うが決着がつかず、両軍とも引き揚げる」としている。（注2）

笠谷・黒田（2000）『秀吉の野望と誤算——文禄・慶長の役と関ヶ原合戦』p.122-123

「この戦いは互角ないし明軍やや優勢のうちに推移していたけれども、おりから黒田隊の救援に駆け付けた毛利秀元の部隊が明軍の側背に襲い掛かったために、明軍の陣容が大きく崩れ、結局そのまま態勢を立て直すこともなく、水原の方面に退いて行った（中略）確かに双方とも決定的な勝利を収めるに至っていない。しかしながら、解生率いる明軍が引き上げたのち、黒田長政の方はなおも同地に数日に渡ってとどまっているという事実がみられる以上、やはりこの戦いは全体としては秀吉軍側の優勢のうちに終息したと判断せざるを得ないであろう」

中野（2008）『文禄・慶長の役』では「9月7日、稷山の西で黒田勢は明軍と遭遇し、戦端が開かれた。両軍はたびたび戦闘を交えたが、決着はつかなかった。翌日は明軍の戦意も萎え、毛利勢も加わって日本側の兵力が増大したことを受けて、撤退を決意する。結局、明の軍勢は水原まで退くことになるが、これを受けて楊鎬は漢江に拠って漢城を防衛する作戦を打ち出し、これを朝鮮側に伝えた。こうして稷山付近における戦闘は終結するが、結果としてこの会戦には決定的な勝者が存在しないため、当事者がそれぞれに自軍

の勝利を宣伝することになる。黒田・毛利勢としては敵の軍勢を後退させ京畿道への侵攻を果たしたという点で重要な意味があり、明・朝鮮側はこの会戦で戦果を挙げたことによって漢城侵攻の企てを挫くことができたと考えたのである。京畿道に入った毛利・黒田の軍勢は9月10日に安城に入り、さらに竹山付近を掃討して、再び忠清道に戻ってくる」

以上、見てきたように、稷山の戦いは韓国の鄭求福のみは日本軍と戦ったのは朝鮮・明の連合軍であるとしているほかは、全て明軍と日本軍の戦闘としている。勝敗結果についてはは決着つかず、としているものと、特に朝鮮側は明軍の勝利と記述している。日本側は「引き分け、もしくは日本側の優勢勝ち」と見て居る。井邑および全州での諸将の会議決定によって全羅道・忠清道の掃討を終えて南岸に撤収して築城し、在番の将兵を残して、それ以外の者は帰国する、という方針にしたがって、黒田勢も南下したのだった(注3)。

IV・考察と結論

中央日報2012年8月18日「歴史教育は事実に基づくべき＝韓国」と題する社説で、

「若い世代に対する歴史教育は、客観的な事実を基盤に過去を教えるものでなければならない。その歴史が栄光的なものであれ、屈辱的なものであれ、過去をありのままに正しく知る必要がある。そうしてこそ若い世代が過去から教訓を得て、未来に対応できる。」

と述べている。この社説で具体的に問題にしているのは京畿道(キョンギド)教育庁が制作した「北東アジアの平和を夢みて」という資料集は、学校の授業の補助教材として使用されるには不適切であると指摘している。東北アジア歴史財団が検討したこの資料集は誤字・脱字だけでも10カ所以上もあり、誤った内容もいくつか見つかったという。さらに、この資料集は檀君神話を歴史的事実として記述しているが、これは国内古代史学界の一致した意見ではないし、問道(中国東北部の北朝鮮と接する地域)を韓国の領土と記述した部分も、中国との外交問題に発展する余地がある、という。

「私たちの歴史教育は歴史的事実とこれを眺めるさまざまな観点をバランスよく教えるものでなければならない。学界でも論争がある一部の意見だけを教えるのは問題だ。事実に基づいてこそ、私たちが周辺国の歴史歪曲行為に堂々と対処することができる」と主張し

た。李栄薫らの『反日種族主義』で、日本統治時代に総督府は土地調査事業を通じて農地の40%を奪い、銃剣を突き付けて米の収穫の50%を奪った、というのは事実でないと主張すると、多くの歴史家が実証的な反論をせず、「土着倭寇」などのレッテルを貼って、国民を煽り反発している。松本厚治(2019b)によると、朴成寿(韓国精神文化研究院教授で国史編纂委員会編室室長)が「客観的考証や実証では歴史の真実は把握できない、真の歴史とは、国民の愛国心を呼び起こすものでならない」と繰り返し発言したという。「真実な愛国心を持って歴史を叙述しなければならないのであり、愛国心を呼び起こすことのできる歴史だけが本当の歴史なのである」また、「歴史教育は、あくまで国民の士気を養うためにあるのです。歴史教育は若者の気を生かしてやらなければなりません。勇気と士気の源泉になるようにしなければならない」との『民族抵抗の史学の再評価』という著書の一節を紹介している(松本, 2019a, p.269)。前述の李大根のいう「国家、民族、家門の利益のためには虚偽、歪曲、ねつ造も許される」とする倫理観に基づき、青少年の愛国心を高め、士気を涵養するため、上記の3点の教科書も事実とは違う記述をしているのであらうと思われる(注5)。

今回、文禄・慶長の役の文献を多数見ていると韓国人が嘘に寛容であるという印象を受ける。例えば、朝鮮水軍の提督として類まれなる戦いをした李舜臣を祀る「李忠武神道碑」(忠武は李舜臣への諡号)の碑文が旧参謀本部編纂の『朝鮮の役』に収録されている(p.393)

「賊船は海いっばいに攻め寄せてきたので、退却しながら、これを閑山島沖に誘い出し、七十余隻を打ち破った。賊将平秀家(脇坂安治が正しい)は逃走し、死者数万人を出して、日本兵は恐れ震えた」

これは有名な閑山島海戦(11592年7月7～8日)の功績を賞賛した部分だが、日本人だったら、この文章をみたら李舜臣に敬意を表するというより、「褒め殺しか?」と思いかねないだろう。確かに李舜臣率いる朝鮮水軍は脇坂安治の水軍を巧みな戦術で包囲し壊滅させた。韓国ではこの海戦を世界4大海戦の一つであるとしている(注4)。しかし、冷静に考えてみれば、脇坂は淡路洲本3万石の大名である。文禄の役陣立表にも動員数1500人と明記されているのだ(三鬼, 2012, p.236)。全員を討ち取ったとしても最大1500人のはずだ。数千というだけでも誇張であることがはっきりしているが、いくら何でも数万の死者と

は。笑い話にしかならない。

閑山島海戦に関する記述でもうひとつの事例を見てみよう。李ヒョンソクは閑山島海戦で手痛い敗戦に見舞われた脇坂安治について言及し、脇坂は決して愚将でなくて、この海戦の直前の竜仁の戦い（1592年5月28日—6月6日）では朝鮮軍5万を脇坂が1500の兵で撃退していることに言及し、林道春（羅山）が安治のために書いた碑文について

「日本の儒者・林道春は脇坂安治の碑銘に、次のように記した“我が兵の死者、数知れぬ中、安治は辛うじて海から生還した。安治は敗戦に憤慨して敗残の兵をまとめて、再び李舜臣を攻撃してその船を奪った”，この“攻舜臣奪其船”は事実無根であるが、安治に対する林道春のせめてものはなむけというべきであろう」（李ヒョンソク『壬辰戦乱史（上巻）』（p.632）

と、林羅山の碑銘の文は事実無根であると判定しつつ、批判せず、寛容に受け止めているのだ。

筆者は林羅山の選文は嘘ではないと思う。脇坂安治は2度目の朝鮮侵攻（慶長の役）の冒頭の漆川梁海戦（日本では「唐島の戦い」とも呼ばれる）で朝鮮水軍に圧倒的勝利（李敏雄，2008）をした日本水軍の一将として従軍し、朝鮮側の船5隻を奪取したのは事実（小川雄，2020，p.153）だからである。このとき、李舜臣は失脚して陸軍に白衣従軍していて、朝鮮水軍の総司令官は元均に交代していたが、そのことを日本側は知らなかっただろう。かつて李舜臣が練り上げていた艦隊の船5隻を奪ったのだから、林羅山の碑文「攻舜臣奪其船」は事実無根とは言えないと解釈できるのではないだろうか。

注1：李舜臣と鳴梁の海戦については稿を改めて検討したい。

注2：『新版・韓国朝鮮を知る事典』の中で「壬辰・丁酉倭乱」において、矢沢康祐は秀吉軍の2度目の侵攻について「1597年1月、日本軍は朝鮮南部4道の領有を目指して慶尚道から全羅道、忠清道に侵入したが、朝鮮軍および明救援軍の反撃を受け、97年9月からは守戦に立たされた。98年3月以降は日本軍の守城（倭城）が次々と撃破され、敗北は決定的となった。そして秀吉の死を契機に、98年10月、朝鮮からの撤兵を開始したが、日本軍は李舜臣ら朝鮮水軍の追撃を受け、同年11月、ようやく撤退を完了した。こうして日本の侵略は失敗に終わった」と述べている。倭城が撃破されたところがあった

ろうか。敗北が決定的、とは何を根拠にしているのか。蔚山城攻防戦では城も完成しておらず、苦戦だったのは事実だが、結果的には明・朝鮮連合軍を撃退しているし、泗川城も島津勢が攻囲軍を撃退、順天倭城も小西行長らが守り切って、明軍とは講和が成った。秀吉の死の時点で、日本軍は6万余が駐留し、既に7万余の将兵は帰国させていた。翌慶長4年に第三次侵攻を計画し、そのときは漢城をも占領することを表明していた（中野，2006，藤井，2020）。秀吉の死によってその構想は実行されなかったが、各倭城へ駐留させた将兵はそのための布石であった。五大老連名の撤収命令をうけると、加藤清正はさっさと撤収し、泗川の島津勢も順天の小西行長らも明軍と平和裏に撤収する約束を取り付けて明軍側から人質まで受け取っていた（北島1995，p.253，中野2008，p.251-253）。「日本軍は李舜臣らの追撃をうけ」というが、正確には「日本軍の一部（小西行長ら）が…」であった。

注3：藤井（2020）の指摘では慶長3年3月12日付けの秀吉の朱印状、小早川秀包・立花宗茂・高橋直次・筑紫広門を宛先として、第三次侵攻をおこなう、朝鮮の都まで侵攻する、そのため、兵糧・玉薬をたくさん備蓄するよう指示している。朝鮮在番の諸将に同様の指示が出された。（p.306-307）

注4：インターネットで検索すると、慶尚南道が運営する「忠武公李舜臣」というサイト、VANK（サイバー外交使節団）という韓国の民間団体（政府からの助成金を受けている）のサイト「Yi Sun-sin, The Man who Transform KOREA」、米国ヴァージニア州に本拠を置く在米コリアン団体のサイト「Yi Sun-sin World」がいずれも閑山島海戦を世界四大海戦の一つとしていた。

注5：『韓国放送通信大学校歴史教科書』では、慶長の役について、「欺瞞的な和平交渉は破れて1597年倭賊は再び侵入してきた（丁酉再乱）。しかし、朝鮮もそれまでに訓練都監を設置するなど軍備を整えていたので、すぐに反撃した。敵は情勢が不利になると、1598年8月、豊臣秀吉の死を契機にすべて逃げ帰った」と3行で記述している。古代から現代まで記述する教科書であるという制約があるのはわかるが、「明」の一字も出てこないは訝しい。明軍の助けなく自力

で日本軍を撃退できたかのような記述である。

文献等

- イ・インソクほか (2013) 『世界の教科書シリーズ (39) 検定版・韓国の歴史教科書「高等学校韓国史」』 明石書店
- 小川隆章 (2021) 「近世朝鮮社会の4つの特徴に関する付加的考察」 環太平洋大学研究紀要第17号
- 小川雄 (2020) 『水軍と海賊の戦国史』 平凡社
- 河永輝 (2008) 「火旺山城の記憶——神話となった義兵士への再照明」 鄭杜熙・編著 (小幡倫裕・訳) 『壬辰戦争——16世紀日・朝・中の国際戦争』 明石書店 p.129-163.
- 笠谷和比古・黒田慶一 (2000) 『秀吉の野望と誤算 文禄慶長の役と関ヶ原合戦』 文英堂
- 上垣外憲一 (2002) 『文禄・慶長の役 空虚なる御陣』 講談社学術文庫
- 韓国教育部編 (2003) 『世界の教科書シリーズ1 新版・韓国の歴史「国定韓国高等学校歴史教科書」』 明石書店
- 北島万次 (1995) 『豊臣秀吉の朝鮮侵略』 吉川弘文館
- 北島万次 (2002) 『日本史リブレット 秀吉の朝鮮侵略』 山川出版社
- 北島万次 (2017) 『豊臣秀吉朝鮮侵略関係資料集成3』 平凡社
- 北島万次 (2001) 「文禄・慶長の役」『日本歴史大事典 3』 小学館 p.620-623.
- 北島万次 (2001) 「文禄・慶長の役」『国史大辞典12』 吉川弘文館 p.429-432.
- 旧参謀本部 (1995) 『朝鮮の役』 徳間文庫
- 金熙明 (1972) 『日本の三大朝鮮侵略史—倭寇・壬辰倭乱・日韓併合と総督政治』 洋々社
- 関周一 (編著) (2017) 『日朝関係史』 吉川弘文館
- 宋チャンソプ・洪淳権 (藤井正昭・訳) (2004) 『世界の教科書シリーズ⑨概説・韓国の歴史 韓国放送通信大学校歴史教科書』 明石書店
- 津野倫明 (2004) 「慶長の役における長宗我部元親の動向…全州会議の意義を中心…」 黒田慶一・編 『韓国の倭城と壬辰倭乱』 岩田書店 p.253-277.
- 鄭求福 (2005) 「壬辰倭乱の歴史的意味—壬辰倭乱に対する韓・日両国の歴史意識—」 日韓歴史共同研究委員会 『日韓歴史共同研究報告書第2分科篇』 p.493-512.
- 中野等 (2006) 『秀吉の軍令と大陸侵攻』 吉川弘文館
- 中野等 (2012) 『戦争の日本史16 文禄・慶長の役』

吉川弘文館

- 藤井譲治 (2020) 『天下人秀吉の時代』 敬文舎
- 松本厚治 (2019a) 『『韓国「反日主義」の起源』 草思社
- 松本厚治 (2019b) 「韓国のウソに立ち向かえ」 WILL 9月号 p.194-216.
- 三鬼清三郎 (2012) 『豊臣政権の法と朝鮮出兵』 青史出版
- 矢沢康祐 (2014) 「壬辰・丁酉倭乱」 伊藤重人ほか監修 『新版・韓国朝鮮を知る事典』 平凡社 p.264-267.
- 李ヒョンソク (1977) 『壬辰戦乱史 (上・中・下巻)』 東洋図書出版
- 李啓煌 (2014) 「朝鮮から見た文禄・慶長の役」 大津透ほか編 『日本歴史第10巻近世1』 岩波書店 p.100-134.
- 李大根 (2020) 「徴用工に日本が補償する道理はない・韓国人学者の直言・日本は資産10兆円を譲った」 文芸春秋 9月号 p.142-149.
- 李敏雄 (2004) 「丁酉再乱期における漆川梁海戦の背景と主要経過」 黒田慶一・編 『韓国の倭城と壬辰倭乱』 岩田書店 p.395-429.
- 柳成龍 (朴鐘鳴・訳注) (1979) 『懲毖録』 平凡社東洋文庫